手作りの観光地域づくりと共生社会

奈良学園大学特別客員教授　野口隆

はじめに

わたしは、奈良学園大学の有志の研究者がつくる「共生社会研究会」に参加する中で、これまで研究の対象とした地域活性化に取り組む人々の多様な実践のなかに、共生社会を実現していく際の重要な手掛かりがあると考えるようになりました。すなわち、手作り型地域づくり観光（後述）の活動、それは、任意団体～株式会社まで多様ですが、その中に次のような、共生社会に通ずる何かを見いだしました。

・その中で活動する人々の精神・・・共助の精神

・活動のありよう・・・多様な人々が、自由に、多様性のある形で、自主的な協力関係

・あるいは地域での他の活動主体、行政や民間企業、地域団体などとの多様なかかわり方

以下、近年の観光の変化、その中から生まれてきた手作り型観光地域づくり、そして、そのような活動と共生社会の関係について述べる。

第１章　観光の変化

１．　近年の社会変化と観光の変化

高度経済成長を通じて豊かな社会が実現したのち、オイルショック、バブル経済の崩壊、低成長社会を体験し、人々の価値観に大きな変化が訪れました。それは一言でいえば、これまでのような高成長を追い続けることへの疑問であり、ものの豊かさより心の豊かさを求めるといったライフスタイルの転換をめざす動きでした。

スピードよりはゆとり、くつろぎ、本物の良さを求める傾向、食文化の追及、女性の活躍、「ほっこり」、「まったり」といった言葉が、よく使われるようになりました。

観光の分野では、

団体（会社、町内会、農協）旅行　⟶　個人、友人、グループの旅行へ

見る観光　⟶　する観光、体験する観光、自分で作ったり、味わったりする観光
テーマを持った観光（スポーツツアー、アートツアー、趣味のツアー、鑑賞の旅など）へ

のような変化があり、これに伴って農業の６次産業化が進んだり、農業や田舎・地方の再発見がおこなわれました。（注３）

また、旅行事業のスタイルも、大都市で旅行社、エージェントがツアー客を大量に集め、観光地へ送り込むようなスタイルだけではなく、地方の観光地の人々自身が旅行を企画し、旅行客を集める「着地型観光」が少しずつではあるが、各地で始まっています。

このような観光の新しい変化をあらわす言葉として、「ニューツーリズム、エコツーリズム、グリーンツーリズム、まちづくり型観光、サルく観光、産業観光」などの新しい言葉が、各地の実践事例を背景に生まれています。

また、「もてなしを大事にする」、さらには、「もてなす側ともてなされる側は、対等な交流関係であるべきだ」という考えも新たに生まれています。

２．ミニ観光：手作り型観光地づくり

奈良県立大学（当時）の村田教授が中心となり、延べ数百人の人が参加した「奈良の将来ビジョン」を作る活動の「観光交流部会」は従来型の観光を「マス観光」と名付けました。

これに対して、これまで観光客がほとんど訪れたことのない無名の町や村で、地域の人々が手作りのイベントや施設などを作り、訪問客との交流やもてなしを行っている例が増えています。このような観光を「ミニ観光」と名付け、このような交流を大切にするミニ観光が、さらに発展していくことが望まれると主張しました。

マス観光・・・旅行代理店が主体となる従来型の観光

ミニ観光・・・地域の人々が主体的に活動し、地域資源を生かし、訪れた人たちを心からもてなす、交流する観光。前述のニューツーリズムなどと呼ばれる観光と共通性がある。

本稿では、奈良の将来ビジョンの「ミニ観光」という名称を、より実態を説明しやすい「手作り型観光地域づくり」または、単に「手作りの観光」と呼びます。（注４、注５）

第２章　手作り型観光地域づくりの事例

筆者の知る「手作り型観光地域づくり」をいくつか紹介します。

１．奈良県高取町の「町家の雛めぐり」

１）　高取の町

高取町は、高松塚古墳などの飛鳥時代の遺跡で有名な明日香村の南に位置する人口７，８００人の小さな町です。戦国時代に越智氏によって築かれた山城は、標高５８３ｍにあり、豊臣秀長の命を受けた本多氏によって、高さ５ｍの石垣を持ち、城内周囲３ｋｍ、城郭内周囲３０ｋｍの堂々たる山城が造られました。城は明治に入っても存在しましたが、２０年に取り壊されてしまいました。しかし今も、日本の３大山城の一つと言われています。

江戸時代に植村氏が入城し、山のふもとに城下町が形成され、やがて、殿さま以下武士たちも住むようになりました。２万５千石の城下町として、政治と近隣の商業・交易の中心地として、また、壷阪寺の門前町として栄えた歴史を持っています。

明治に入り、城主と城を失い一時すたれましたが、薬の町として再興し、明治１５年には商家３００軒と言われました。

大手門から北に広がる町は、古代明日香の宮の造営のため、土佐から連れてこられた人々が住んだことから土佐街道の名で呼ばれ、武家屋敷や古い町屋の残る美しい町並みです。

２）野村さんの活動

地元の観光ボランティア会の会長を務めていた野村幸治さんは、もと野村証券の証券マンですが、１０数年前に定年で町へ戻ってきてびっくりしたといいます。

子供のころ、お店が３００軒以上あってにぎわっていた高取の町は、今は２０軒たらず。寂しい町となっていたからです。若者は、仕事や学校の関係で町を出てしまい、残るのは、高齢者ばかりの町となっていました。

野村さんは、何とか高取の町を昔のように活気あるにぎやかな町としたいと考えました。そのために、「観光振興によって、町を訪れる人を増やし、交流人口の増加によって町に活気を取り戻したい」と考え、まず、観光ボランティアの会を結成しました。また、高取城を訪れる人々を対象に、大正時代に呉服屋さんだったという空き家を改装し、観光案内、休憩、お土産の販売、交流のスペースの役割を果たす「夢創館」をオープンしました。

最初、町の資源を高取城と考えた野村さんは、高取城を復元することを考えました。しかし、それが途方もない費用が掛かることがわかると、実物の再現を断念し、かわりに当時実用化が始まったばかりのＣＧによる再現をしようと考え、再現の協力を関西の電気メーカーなどに依頼しましたが、すべて不調に終わりました。

その頃、奈良産業大学に情報学部ができたことを聞き、野村さんは何のつてもない同校を訪れました。幸い同大学の片岡先生が協力することになり、先生とゼミ生の一年にわたる苦労の成果として、高取城ＣＧは見事に完成しました。これは、マスコミのとりあげるところとなり、また、夢創館での常時上映の効果もあり、高取城の知名度は少しずつ上がっていきました。

３）町家の雛めぐり

しかし高取城は、険しい山道を２時間近く登らねばならない処で、一般客を対象とした観光資源となるのは、限界があることがわかってきました。そこで、野村氏とグループのメンバーは、相談、各種の検討を重ね、新たに長期観光振興プラン「土佐街並み天の川計画」を立案しました。このプランは、土佐街道の町並み、城下町の資源（城、城下町、薬資料館、ふれあい体験空間、もてなし処など）をベースに、住民のもてなしをブランド化しようとするものであり、ターゲットを都会の熟年女性と定めました。

そして、計画のメインイベントとして「町家の雛めぐり」が始まりました。これは、毎年３月に、町内の各家にあるお雛様、それは今から５０年以上も前に娘が生まれたとき、実家のおばあさんが送ってくれたものだったり、活動に参加しているおばあさんが、お嫁入りのとき持ってきたものだったりしました。いずれも、もう何十年も押し入れや、蔵の中にしまわれ、眠っていたお雛様でした。これを、町の各家が久しぶりに出して、表の間、玄関やお店の正面にかざってもらったのです。

３月の一か月、都会から訪れ、お雛様を見る人々、中高年のご婦人たちに、おうちの人たちは、「まあ、お茶などいかがですか・・・」と声をかけ、娘が生まれたころ、自分が若かったころの思い出話の花が咲く毎日が続きました。

この期間に町を訪れた人は

第１回　２００７年：　８，７００人、お雛様を飾った家：３６軒

第２回　２００８年：２５，７００人

第３回　２００９年：３８，３００人

第４回　２０１０年：４９，１００人、お雛様を飾った家：９０軒

と、年々増加し、２０１６年の３月まで毎年、４万～５万人近い観光客が訪れています。また、この期間に町を訪れた人の感想、観光客を迎えた人の感想は、次に示すとおりであり、古いお雛様をめぐって、訪れた人、迎えた人の心の交流がなされたことがわかります。

①観光客の感想：第４回　２０１０年「町家の雛めぐり」

・高取町に住む方のやさしさと歴史を感じ間視させていただきました。美しい町だと思いました。

・町中でのご協力に感謝。心のこもったお心遣いありがとうございました。お茶ありがとうございました。おもてなしキュンときました。

②住民の感想：第４回　２０１０年「町家の雛めぐり」

・３月は楽しい１か月だった。ずっとこれが続いたら良いのにと思った。

・家に来られたお客様の中で、昔の事を思い出されて泣かれた方がおられた。こちらも感動して、涙した。

野村さんたちが目指した「観光交流人口の増加によって、町を元気にする」。すなわち、①高齢者を元気にするとともに、②商業の発展によって町の経済を元気にする、という２つの目標は、町のお年寄りたちがめっきり元気になり、また、古い農協の倉庫が地元の食材を使った食事を提供する大きなレストランに生まれかわったのをはじめ、食事処やお土産店、展示スペースなどがいくつも生まれ、３月のひと月だけでなく、何とか通年営業できるようになり、「町の経済の活性化」も少しずつ進んでいるように達成されています。

４）観光振興、町づくりの戦略

このような心を打つ成果を上げている観光交流活動ですが、その背後には野村さんたちの、ビジネスマン時代につちかわれたマーケティング戦略があります。

・まず第一に、活動の目的・目標が前述したように「観光交流を通して２つの意味で町を元気にする」と極めて明確です。

・また、時代の流れ、変化をきちんととらえ、観光の変化、文化なものの重視、交流の意義の増大を踏まえています。

・高取の町の強み弱みを分析しています。その中で、弱みととらえた高齢者の増加を、自由に活動できる元気なお年寄りが多いと、逆に強味ととらえかえすなど、ユニークな分析をしています。

・活動期間中の訪問客数など各種数字を的確に把握して、これを行動や、自分たちの活動の成果分析に活かしています。

たとえば、３月中の毎日の客数と天気、気温（暖かさ）などから、客数が曜日と関係が薄く、逆に、気温（暖かさ）と密接に関係していることを発見し、これを翌日の食品の仕込み量や人員配置に活かしています。

・また、お客へのアンケート調査から、１年目に来た人の半数以上が２年目に来ていることを発見したり、消費額の平均に客数をかけ、全体の消費額＝経済効果を推計しています。

・イベントの収支計算を明確にしており、イベント直接経費のプラスマイナス＝０を実現し、黒字を残しています。

・各種メディアをうまく使い分け、近隣から広域まで広報・集客しています。また、ミニコミを活用することで、マスコミの注目を集める戦術をつかっています。

なお、広報の成果はメンバーの士気向上や、周りの人や家族の活動への理解を得ること、行政の協力的対応をもたらすことにも繋がっています。

５）今後の展開

３月だけに観光客が集中している現状を改善するために、秋の案山子祭りや、高齢者の健康フェアなど、集客の通年化のための努力を継続しています。また、魅力の多様化のための常設の文化展示場や、その他の観光資源の開発を試みています。これは滞在時間の延長の効果も生んでいます。（注６、注７）

２．奈良県宇陀市室生深野

１）室生深野地区

旧室生村（現在宇陀市）の深野地区は、奈良県の東の端、三重県名張市に隣接する戸数３６軒の典型的な中山間地域の小集落です。車で通れば、あっという間に通り過ぎる一見何もない地域ですが、南向きの明るい斜面に広がる棚田の風景は、しばらく見ているだけで心がのびやかに安らぐ景色です。しかし、高度成長期からバブル期を経て、人々の生活や意識も変化し、かつては緊密であった人々のつながりも次第に希薄になりつつあり、村人の高齢化も進んでいきました。

２）北森さんと深野〇〇会

地元出身の北森さんは、大学を出て大手化学メーカーに勤めていましたが、１９８４年、家の事情で家族とともに実家にもどり、そこから毎日、大阪に通うことになりました。その時、改めてまわりをみると、昔とは違う地域の姿があり、このままでは、地域を維持することすら危ぶまれることも予想されました。将来を見据えると、地域の人だけでは活気のある地域を保つことはできないとの見方が大半となる中で、１９８６年、北森さんは当時の若者（友人たち）と、この地域に活力を取り戻し、互いに助け合い行動する組織「深野〇〇会」を結成しました。

深野〇〇会の結成目的と活動内容は、「都市との交流を活動テーマとし、地域の良さを自ら作り出し、都市住民（よそ者）を積極的迎え入れる心と姿勢をはぐくみこと。そして高齢者に感謝し助け合い協力し合うあたたかい地域を作ること。さらに寄り合い、顔を合

わす機会を増やす」です。

また、「活動を通じて、高齢者の皆さんが何事にも参加でき、楽しい地域ができると認識してもらえ、昔から営々と守り続けてきた伝統行事が継承できること。都市住民の感動や喜びを見ることによって、自分たちの地域の良さと誇りを醸成でき、多くのよそ者（＝仲間）が来てくれることで、地域に活気が生まれること」を期待しました。

なお、〇〇会としたのは、活動の内容をあらかじめ決めるのでなく、「必要に応じて色々なことができるように」という思いからでした。今、〇〇会の下に「ササユリ保存会」など具体的な名前を入れた活動をいくつも行っています。

活動はすべてボランティアで、①続ける、②楽しむ、③自由な参加の３項目を重視し、「新しい田舎の時代がやってくる」と信じて、進んできました。

３）いろいろな交流活動

これまでの活動は、次に示す通り、地域の人々のつながりを強める活動と、地域外の人たちのつながりを広げる活動の２つにまとめられます。

（ア）　地域の人々のつながりを強める・・・北森さんの言葉では「内部融和的交流」

・これまでの祭りを、全員参加の秋祭りに変更：地区を出ていった子供や孫たちも帰ってきて参加する。

・伝統行事の継承。

・地域の環境美化と維持管理のルールの設定。

・ビオトープづくり：棚田の石垣積みの技術が消えかけていました。

・本シメジ・まつたけ再生活：つくばの森林総合研究所などに協力してもらいました。

・里山の整備。

・ササユリ保存・保護活動：後でくわしく述べます。

（イ）地域外の人々のつながりを広げる活動・・・積極的発展的交流。

・都市からの移住者の受け入れ。

・ハイキングルート設定。

・奈良県立大学との交流：毎年秋まつりに参加、今年で１３年目。

・ササユリ保存活動に都市会員を募集。

・炭焼き体験の炭窯新設:森林組合と協力。

・小浜市深野との交流：「深野」つながり、休耕田で萱づくりをしました。

・海外の若者をホームステイで受け入れ。

４）活動の成果

・当初の困難：活動を始めたころ、地元高齢者の中には、価値観の違う都市住民の受け入れには大きな抵抗感がありました。抵抗がなくなるまで６年かかったといいます。いまでは積極的に迎え入れる都市住民（＝仲間）という意識に変わっており、「よそ者」という言葉は死語となっています。

・奈良県立大学との交流：１９９９年には県立大学の麻生ゼミの学生が地域に入り込み、村祭りなど各種の活動に参加しました。各家を巡って住民意識調査を実施し、「ユートピア深野」構想を提案しました。この外部からの地元の好評価により、地域の人たちは自分たちの気が付かなかった良い点を認識するようになりました。

・「にほんの里１００選」：２００９年には、「そこに住む人々の営み」が評価され、朝日新聞・森林文化協会の「にほんの里１００選」に選ばれました。

・「未来遺産」：２０１３年には、ササユリの保存・保護活動がユネスコの「未来遺産」に選ばれました。この後のササユリ鑑賞会には、京阪神から都市会員、８７名の参加があったのをはじめ、毎年、各地からバス旅行でのササユリ見学が続いています。

・この他にも、福井県小浜市との交流があり、また「地域づくり活動」や「空き家のない村・でない村」として徳島県上勝町の人たちが見学に訪れています。

・都市からの移住者：これまで、都市部から４世帯の若い家族が深野に移り住み、深野〇〇会の活動を一緒に行っています。

・ササユリ庵：大阪のベンチャー企業が深野に立地し、ビジネスを行っています。さらに同社は、集落の古いわらぶき民家を改築した迎賓館「棚田の里ささゆり庵」をオープンしています。

・国際交流、ホームステイ：室生国際交流村実行委員会（２００４年結成）が、県の国際交流団体の要請を受け、海外の若者団体を集落の各戸がホームステイで受け入れています（２泊から８泊程度の団体を年５～６回受け入れています）。村の誰も外国語ができるわけなどないにもかかわらず、２０１１年の東日本大震災では、以前ホームステイしたドイツ人の小学生の祖父から「キタモリ、心配している。すぐドイツに来い。受け入れの用意がある」と電話がかかってきたほど、心の通った交流をしています。また、中国人の高校生は、「日本人はひどい人たちと聞いていたが、全然違った」と感動していたといいます。なお、一度に５０人～６０人のホームステイの受け入れができるのは、関西では他にないと言われています。各家がそれぞれ２～３人ずつの学生を受け入れるからできることです。

５）今後の課題：北森さんの構想

・ほとんどの活動が人々のボランティアで行われていますが、これからは特産品開発や農家民宿、レストランなど地域にお金の落ちる活動も必要と考えています。

・女性が活躍し始めておりさらなる活躍を期待しています。また、行政との連携を図ります。これは、活動への若者の参加、各種申請事務などへの協力を期待しています。

・都市住民との交流をさらに強めたい。企業のCSR戦略とタイアップを図りたい。（注８、注９）

３．農家レストラン　清澄の里「粟」

１）清澄の里「粟」

奈良市の南のはずれ、天理市との境界線近くの山すその町・高樋町に三浦雅之・陽子夫妻が経営する農家レストラン「清澄の里　粟」があります。奈良の伝統野菜「大和野菜」を主とした料理を提供する「粟」は２００１年オープン。１日限定２０人、１１時～１６時の営業時間です。小さな集落の細い道からさらには入ったところにある「粟」は、よほど注意していなければ通り過ぎる場所にあり、開業前には、三浦さんを知る誰もが「やめた方がいい。お客は来ない」と止めたにもかかわらず、開業以来、土日は予約が取れないほど、盛況です。

２）大和野菜

大和野菜は、奈良県の中山間地域で昔から栽培されてきた家庭野菜です。同じ伝統野菜である京野菜がはじめから商品流通を前提としているのに対して、大和野菜は農家の裏の畑で、家族のだれだれが好きだから、作りやすいからと栽培されてきました。味が良いに

もかかわらず市場に出なかったのは、晩生であり、早生を望むスーパーや市場では出せなかったからです。また、形が見慣れなく、店の棚に並んでいても、どう料理したらよいかわからないこともあったと思われます。

三浦さん夫妻が伝統野菜に取り組んだのは、２人が新婚旅行で訪れたアメリカのネイティブアメリカンの村での体験によっています。伝統的な作物のトウモロコシを大事にしている村には、トウモロコシの種と食文化を軸にコミュニティが成り立っており、いきいきした人の暮らしや文化があったことを見て、これが福祉制度を補完するものになるのではないかと考えました。

帰国後、調べていくと、伝統野菜が残っている地域は「結い」と呼ばれる集落機能が残っていることが分かり、日本でも、伝統的な作物を育てることが地域のコミュニティを守っていくベースになると考えました。そして、この伝統野菜を今の社会に活かしていく１つの方法として、レストランをやろうと決めました。

清澄の里に来たのは、地主である知人に山の草刈りを頼まれたことがきっかけです。それから、この地を拠点に県内各地に残る伝統野菜を研究・保存するため、任意団体「清澄の里」をたちあげ、２人で五條市、大塔村、十津川村など奈良の各地をまわり、中山間地域の農家で作られていた伝統野菜の種や苗をわけてもらい、栽培してきました。

尚、大和野菜には、仏しょういも、どいつ豆、紫トウガラシ、半白キュウリ、ムコダマシなど多数の種類がある。。

３）農家レストランの開業

３年後の２００１年、農家レストラン　清澄の里「粟」をオープンしました。伝統野菜の復活を農家レストランという形で行ったのは、農業の６次産業化を目指したからです。６次産業については前述しましたが、三浦さんたちが、事業を始めた時、この考えはほとんど知られておらず、三浦さんは６次産業のパイオニアのひとりです。

レストランの庭には数頭の山羊がいます。粟を訪れるお客の人気の的となっている山羊たちは、お客さんの相手をしながら、敷地の草刈もしています。これまで何頭も子山羊が生まれ、各地へもらわれていっています。周辺の約４０アールの畑では大和野菜や海外の伝統野菜（エアルームと呼ばれる）が栽培されています。

また、近在の農家１２軒には、野菜の栽培を委託しています。当初、三浦さんたちをどこからかやってきた怪しい若者と、うさん臭い眼でていた地域の人々は、今では、三浦さんたちに、地域農業の経験やお年寄りの知恵を教えてくれる仲となっています。

２００９年には、奈良市内ならまちに、古い町屋を改造した２号店「粟　ならまち町」店を開業しました。ならまち店は、大和野菜を都市でPRするアンテナショップとしての役割をはたすと同時に、立地の良さとそのコンセプトのユニークさ、料理の魅力により、開業以来好調を持続しており、収益源ともなっています。

２０１４年には、粟３号店ともいうべき、レストラン「cotocoto」が奈良町センターで開業し、地域のコミュニティーセンターとして、また、奈良観光の中心地での、奈良の情報発信・交流の拠点としての役割を果たしています。

４）粟の目指す地域づくり

粟２号店の開業を機に、レストラン粟は株式会社化されました。現在、三浦さんの仕事は次のとおり３つの組織の活動からなっています。

・株式会社粟の３店舗は、大和野菜の産業化、６次産業ビジネスの展開をすすめる。
・ＮＰＯ法人「清澄の里」は、伝統野菜を研究・保存し、地域の文化遺産として次世代に継承する。
・五ケ谷営農協議会は地元生産団体であり、ＪＡ奈良県とも協力し、農を通じた地域づくり、地域の発展をめざす。

このような活動を通じて、大和野菜の普及と産業化を軸として、地域コミュニティの維持、再生を果たしていくことが、三浦さんたちの目指す地域づくりです。

三浦さんは、地域づくりは、「命令されてやるものではない。外の人たちと協力しながら自分らでやるもの」と語っています。（注１０、注１１）

５）大阪・空堀商店街界隈のまちづくり

１）空堀というところ

① 大阪城の南の備え

豊臣秀吉は晩年、豊臣家の将来、秀頼の未来に深刻な不安を抱きました。そのため、秀吉は当時、難攻不落と言われた大阪城の防衛をさらに強固にするため、城域を大幅に拡大する大阪城総がまえを作りました。このとき、新たに掘られたのが、大阪城本丸から南１２００ｍに東西に延びる空堀でした。この濠は上町台地を横切り、高低差があるので、もともと水は入れてない空堀でした。

② 第２次世界大戦（太平洋戦争）

時代は移り、昭和の初め、この辺りには、大阪の市街地が広がりました。第２次世界大戦時、昭和２０年のＢ２９の大編隊による大阪大空襲によって大阪の町は一面の焼け野原になりましたが、なぜか、この地域は、焼けませんでした。

③ 界隈の長屋

このため、この界隈には戦前の街並みが残り、大通りを一歩入ると、石畳の路地が続き、木造の家や蔵、長屋が斜面をうまく利用しながら並んでいます。しかし、界隈の長屋は最低でも築７０年以上になり、老朽化が進んでいます。狭い路地に面しているので、法的には建て替え不能であり、仕方なく、トタン板で修繕したりという状態が続いており、住んでいる人々は、自分の家や街を、古い、汚い、恥ずかしいところと思っており、価値を感じていない状態でした。

しかし、バブル経済崩壊後の、外の人々にとってこの街は美しい、懐かしい、安らぐ街

として評価されるようになっていました。

①　　からほり倶楽部の活動･･･長屋の再生･･･

このままほっておけば、周辺で開発が進みつつあるマンションなどによって、この古き良き街は根こそぎなくなってしまうと危機感を持った建築家やデザイナーなど、この魅力的な街とその資源を愛するさまざまな職業の人たちが集まり、２００１年に建築家の六波羅雅一さんをリーダーとする「からほり倶楽部」が設立されました。からほり倶楽部の目的は、

① 美しく歴史のある街の保存再生
② イキイキした活力あるまちづくり
③ 新旧世代と文化の共生

であり、歴史ある街並みや長屋を中心とする環境と趣を大切にし、街を保存再生すること。それらを通して、この街で商いをしたいという人々にも集まってもらい、交流を盛んにし、住民はもちろん、外から訪れた人々がワクワクする様な街を創造すること。それによって、古いもののよさを新しい時代や生活の中に位置づけることで、新旧世代と文化が共生するまちを創造することです。

３）３つの再生事例：「惣」、「練」、「萌」

からほり倶楽部は、このような目的を達成するため、空堀界隈の３つの長屋、古い町屋を改装していきました。改装・開業順に、「惣」、「練」、「萌」と名付けられ、それぞれの町家がカフェ、レストラン、おばんざい食堂、古着販売、アクセサリー販売、雑貨販売、展示スペースなどの複合ショップとして使われています。

それぞれの内容は次の通り

①　「惣」２００２年オープン。

惣は江戸時代の大阪の町衆の自治組織を意味する言葉。２軒長屋を５つの小さな店とし、複合店舗として利用しています。カフェ、雑貨ギャラリー、空堀貸しアートボックス、お寿司屋などがはいっています。

②　　「練」２００３年オープン。

「練」という名称は、江戸時代この辺りで瓦の土がとられ、瓦の製造もおこなわれていたので、土をねる、練と名付けられました。近くに瓦屋町という町が今もあります。元、堺にあったお屋敷を大正時代に移築したもので、敷地は２００坪もあります。平屋部分の元厨房だったと思われるところは１５坪の石畳で、現在は全体の玄関的スペースとして使われています。

主天面した２階建ての蔵は、チョレートのお店です。このほか、おばんざい、クレープ、貸自転車、２階の畳の広間は古い着物きもの屋さんで、中央のスペースは着付け教室に使われ、時には落語会などが催されます。建物奥の庭はむせかえるような緑の空間です。

③「萌」　２００４年オープン

「萌」は直木三十五が通った桃園小学校跡地（今は桃園公園）に隣接しています。１階にはイタリアンレストランやカフェ、ブテック、本屋さんなどがあり、２階は直木三十五記念館と古本屋、雑貨屋が入っています。

４）直木三十五記念館

直木三十五記念館は、直木賞に名を遺す直木三十五を記念する資料館です。直木は大正から昭和にかけて活躍した小説家で、菊池寛らと親交をかわし、文芸春秋の創刊にかかわりました。市岡中学を卒業するまで空堀近くの自宅で暮らし、のち早稲田大学に進みました。作品を再評価し、まちづくりにつなげたいと有志の努力で、没後７０年を記念して作られました。芸術家の記念館などで、地元自治体や親族が建てたものでない、日本で唯一の存在で、記念館の隣の本屋さんが記念館の受付を兼ねています。だから、公共施設によくあるような暇な管理人はいません。

５）古いものを活かして街を再生

町家や長屋の再生は、基本的にまず企画を立て、テナントを募集します。このとき、骨格補強、耐震補強をおこなっています。スケルトン貸しなので、内装はテナントさんが行います。家賃は、からほりクラブが受け取り、大家さんに支払う、いわゆるサブリース方式をとり、大家さんの手間や不安解消を解消しています。家主の意向も尊重しながら、街に新しい業態を取り込み、街の賑わいの再生を図り、街を望ましい方向へ。また、街並み、家並みの整備、保全へとけん引しています。ちなみに「惣」の場合、当初家主が考えていた駐車場経営よりも高い家賃収入になっています。

街の人との関係は、理解してくれる人、無関心な人に分かれていますが、当初の不安、疑いは減っています。

６）からほり街アート

２００１年から１０年間、毎年秋の土日、からほり界隈の露地や家の軒先、小さな広場などで、公募したアーチストの作品を展示しました。毎年６０人以上１００人近いアーチストと５０人のボランティアが参加し、２日間で１～２万人以上の来訪者がありました。直木三十五記念館と同様のからほり倶楽部の文化活動です。

７）さらなる展開

①　他地域への展開

からほり倶楽部の中心メンバーたちが空き家バンクを経営し、堺市浜寺や大阪市玉造や緑橋でも町家、古民家の再生事業を手掛けています。

②　商店街とのかかわり

当初、商店街の人は、からほり倶楽部の活動には無関心でしたが、次第に変化。少しず

つ交流が進んでいます。また、長い通りにいくつかに分かれていた商店街の組合が、共同して活動するようになったことは、からほり倶楽部の既成の組織の境界にはこだわらない活動から影響を受けたと考えられます。

何よりもこの１０年、空堀通商店街に改装・改築する店や外部から出店する人が増え、街が明らかに動き始めていることがわかります。（注１２、注１３）

５．京都伏見の観光まちづくり

１）伏見の町

近代以降、鉄道や自動車が生まれるまで、道路ではなく川が最も重要な交通路でした。特に淀川や宇治川、木津川などの大河川は、都と畿内、地方を結ぶ、人、モノ、情報の新幹線・高速道路ともいうべきものであり、それは海外にまでつながっていました。

桃山時代に豊臣秀吉が伏見に城を築いたとき、築城のための建築資材を運ぶ内陸港：伏見港を作り、さらに城下町の基盤を整備しました。伏見には全国各地から多くの商工業者が集まり、全国最大の城下町となりました。

また、徳川家康も関ケ原の勝利の後も伏見城にとどまり、ここから全国を統治しました。家康は伏見に我が国最初の銀座を設置し、貨幣経済の中心としたため、伏見は全国有数の商業都市として発展し、京都、大阪、奈良､近江、瀬戸内海、全国を結ぶ港湾都市（京都～（高瀬川）～伏見～宇治川～淀川～大阪)、宿場町として、三十石船などの幕府公認の船が出入りしました。

また、伏見は伏水とも書いたように、豊富な地下水に恵まれ､江戸時代には灘と並ぶ全国有数の酒造りの町となり、疎水へりに酒蔵の並ぶ町となり、今も大倉酒造をはじめ全国ブランドの酒造メーカーの集積する町です。また、京都市南端の伏見区は、工場も多く、人口２９万人と市最大の行政区です。

２）永山さんの活動

昭和３年から数年間は伏見市であったほど、伏見は古い独自の文化を持ち、自治意識の高い町でしたが、昭和３０年～４０年と、地場産業である酒造業の地盤沈下、商業中心地としての力の低下により、地域の活力が低下していました。

このような伏見の町に、博報堂に勤めていた永山さんが住み、1年後には職を辞めてミニコミ誌「The Fushimi」を発行するようになりました。町が元気にならないとタウン誌も売れないと、観光活動に取り組み始めた時、月桂冠社長であり、時の観光協会会長であった大倉敬一氏から「これからの観光協会は、今までのような名誉職の集まりでなく、町の発展を担う実行力を持たねばならない」との考えから声がかかり、観光協会の専務理事に就任しました。

そのとき始めたのが、酒蔵寄席、人力車を酒蔵界隈に走らせたことであり、伏見独自の魅力づくりのきっかけになりました。

３）築港４００年記念イベントの開催

最初の転機は、伏見港開港４００年祭の開催でした。京都府港湾課が管理する宇治港と宇治川流派（高瀬川の下流から宇治川へつなげる町の中を流れる小運河。宇治川へは水門でつながる）の周辺整備が完了したことを記念するイベントをやらないかと京都府から打診があったのです。

そこで、伏見観光協会を母体として、市内商工業者の若手メンバーで実行委員会を作り、大規模なイベント開催に取り組みました。１９９４年に開催したイベントの内容は、花火大会の復活、さだまさしコンサート、世界酒サミット、酒蔵ライブ、酒蔵の有効利用を考える「酒蔵コンペ」、十石船の造船・運行、三十石船復元などでした。

大手広告代理店をつかわず、すべての企画を自分たちで立て、自分たちが実際に手を動かして実行したので、丸投げ外注したら、実質１０倍の２億円程度規模のイベントが総予算２０００万円で実現しました。

また、それまで同じ町に住みながらお互い良く知らず、何かを一緒にやると言ったこともなかった色々な業種の人が、１つの目的に向かって努力すること、自分たちの力でイベントを成功させることで地域の深い絆が生まれました。これこそ、永山さんが狙ったことであったと、後に氏は述べています。

４）川の清掃～川を活かす

①河川の清掃

１９８０年代、町の中を流れる河川は汚れきっていました。１９８９年頃から、永山さんは奥さんと２人で河川の清掃を始めました。自転車、リヤカー、冷蔵庫など、河川全域に大型ごみが散乱しており、「いったい、誰が捨てるのか」と思っていましたが、夜中に見ていたら、川の前の民家から人が出てきて、その日のごみをポイと捨てていることが分りました。１９９０年からは、「濠川・宇治川流派・河川清掃」を、地域の人々や諸団体に呼びかけました。しかし、川掃除をする永山さんを「がたろ」とあざける、町の有力者もいました。

その後５年たっても、川は、少しもきれいになりませんでしたが、伏見開港４００年祭で川を使った様々なイベントを行った頃から、少しずつ人々の意識が変わり始めました。１９９５年から定期的な川藻の除去・清掃が実施され、十石船の期間限定運航が始まり、２００２年には、十石船の運航コースに雪柳１８００本などが地域の人々の手で植えられました。

さらに、２００３年の「世界水フォーラム開催」「三栖閘門オープニングイベント」など、毎年、川に関係するイベントが開催され、紫陽花や紅葉の植樹で水辺は次第に美しくなっていきました。また、十石船の運行が２００４年から通年（３～１２月）となり、三十石船のシーズン運航が始まり、水辺のライトアップ運行､伏見万灯流しなど、水辺を活かした町づくりが進みました。

②河川レンジャー

１９９７年の河川法改正で国土交通省は、今後の河川管理・整備は住民との連携協力に

より進めることを決め、河川レンジャーの制度を作りました。永山さんも淀川流域の河川レンジャーに選ばれ、伏見では国土交通省との連携の下、伏見ジュニア河川レンジャーの活動が生まれました。これは、区内の小学校４年生を対象に、以下の３つの学習を修了すると「ジュニア河川レンジャー」に認定され、認定バッジが授与されるというものです。

・十石船に乗って川を観察、家庭で保護者と話し、レポートを提出。
・川べりを歩き、ごみをひろい、川辺の生き物を観察する。
・町の歴史や舟運、河川について出張講座を受講。

１９９８年から毎年、３～５校が参加し、毎年４００～７００名のジュニア河川レンジャーが誕生しています。

５）観光まちづくりへの展開

このようにして、地域の河川が次第に美しくなり、人々の理解も深まっていく中で、町の中でも酒蔵を活かしたお店や、水辺を生かしたがい町づくりが進められ、始めは点であったものから次第に面へと広がっています。

また、２００２年には中心市街地活性化法にもとづく TMO（株）伏見夢工房が設立され、永山さんが観光担当部長に就任。以降、TMO が中心となって事業が進んでいます。

すでに町なかには、古い建物を生かした飲食店「鳥せい」があり、１９８９年には月桂冠大倉記念館が開館していましたが、２０００年すぎて、飲食店などが出店し、まちづくりも活発になり、２００２年には観光案内・清酒販売・喫茶・お土産・喫茶の「伏見夢百衆」の TMO による企画運営がはじまり、２００６年には「黄桜カッパカントリー」が開館、以降、酒蔵を利用した大型飲食店「月の蔵人」など、伏見らしいお店が多くできています。また、地域ブランド「くらわんか豆腐」「京美酒うどん」が販売されています。（注１３、注１４）

第３章　手作りの観光活動と共生社会

この節では、前節で紹介した事例などをもとに、これらの「手作り型観光地域づくり＝ミニ観光」に共通にみられる特徴を整理し、さらに、それらの特性をもとに共生社会実現とのかかわりを検討します。そして最後に、政府が進める地方創生についてコメントします。

１．手作り型観光地域づくり＝ミニ観光の特徴

①　リーダーの存在

高取町の野村さんをはじめ、どの事例の場合も極めて優れたリーダーが活動団体を率いています。主観的表現ですが、それらの方々は、これまで私が民間企業１０年、シンクタンク３０年、大学１０年で、ともにすごしたどの世界の人、ビジネスマン、役人、先生などと比べても、皆、個性的で、特色のある人々であると感じています。

まったく何もないところから物事を作っていくベンチャー的、起業家精神。参加者がほぼ無報酬であるのに、喜んで活動に参加していくリーダーシップ。そして周りからの無理解や嘲笑、足の引っ張りなど、さまざまな困難を克服していく精神力は、並大抵のものではありません。

それは、彼らが何も特別な才能の持ち主だからというわけではなく、何もないところから物事を立ち上げるという普通でない経験が彼らを、お役人やサラリーマンと違った存在へと押し上げていったと考えられます。

②メンバーのやる気、自発性

前述のリーダーシップとも関連しますが、会社や役所では、まずかっちりした組織があり、命令者には役職と権限、強制力があり、しかも構成員には給料や賞与など報酬を払っています。

しかし、手作り型観光活動に参加している人は、命令や指示ではなく、お願いであり、報酬はゼロか実費程度であるにもかかわらず、民間企業の社員や役人に比べて、はるかにいきいきと自発的に行動しています。

② 中間組織、非営利団体

手作り型観光活動を実施している人達の組織は、株式会社の形をとるものもありますが、おおむね単なる団体（観光ボランティアの会、○○を進める会など）やＮＰＯ法人など非営利組織です。法人化している団体も、個人の集まりから始まっています。株式会社の形をとっている場合も、何らかのミッションをもとにした会社であり、一般的な営利企業とは少し違う。いわゆる社会企業です。また、役所や行政が作った組織ではないことは言うまでもありません。

③ 社会的使命、ミッション

前の記述と重りますが、団体、組織の目的は、営利（だけ）ではなく、むしろ営利の前に、「○○地域を元気する、あるは○○の自然を保全しよう、○○祭りを復活しよう」といった社会的に意味のある目的と使命感を、組織そして構成員が共通に持っています。

民間企業や役所に勤めている人に「なんで働いているの？」と聞いたら、使命感はあるものの、まず、「自分の生活のため」、「妻子を養うため」と答えるのが普通だと思いますが、これとは少し違っています。

④ 行政に過度に依存しない

高取町で野村さんが活動を始めた時、町の助けは当てにできない状況でありました。活発に活動している成功事例で、行政に言われて始められた事例は、ほぼありません。

多くの人が指摘する通り、補助金目当てに始められた事業は、（持続を目的にしていなければそれでよいのだが）、補助金がなくなった時、たいていは減収を補うすべがなく、継続不可となっています。

長野県の「くるくるエコプロジェクト」という活動では、課題を考える初期のブレーンストーミングで「役所に頼んでなになにしてもらう」を禁句にしました。まず、自分たちの力で何ができるか、とことん考えるためでした。

この点では、７０年代までの市民運動が「行政の責任を追及し、責任を取らせる」「行政に何かやらせる」ことを主目的にしたのと、これらの諸活動は少し違っています。もちろん、責任を取らせることが必要な場合もあることを否定するわけではありませんが。（注１６）

⑤ 市場との関係

事例で取り上げた観光活動の成功要因として、当事者たちが市場にうまく対応していることも見逃してはいけません。

高取町の野村さんの場合を例にあげれば、「町を元気にする」という目的を、「町に落ちるお金を増やす、商業を振興する」と「町の老人を元気にする、生きがいを感じる場と機会を作る」とさらに２つの目標で明確にしました。その実現のためのマーケティング戦略、特に都市の中高年女性を主な標的としたターゲティングの適切さ、やっている側の人も含めた女性が喜ぶこまかい戦術の実行、さらに、日ごとの天候や気温、客数の把握や、アンケート調査の実施など数字、データの収集、分析、PDCA サイクルの重視などが最も典型的ですが、他の事例においても、それぞれ巧みなマーケティング、PDCA サイクルの実行は共通しています。また、お金をかけない広報活動の巧みさについてもそれぞれ見事です。

お金儲けが目的ではありませんが、活動の金銭的帳尻はきちんと合わせています。それが、活動の、そして活動参加者の持続可能性を支えています。

３．共生社会実現とのかかわり

① 共助の意識

共生社会を考えるとき、次の３つ、自助、共助、公助が主なジャンルとなると橘木教授も述べています。教授によれば、「自助とは他人とか政府の助けや支援等を排除して、自分で強く生きる」ということであり、「共助とはコミュニタリアニズムの考え方に近い、周りにいる人たちが一緒になって何か困った時には助け合うとか、周りにいる人たちがお互いに相手に関心を持って助け合うこと」であり、「公助とは言葉のとおり公共部門、中央政府、地方政府が人間生活をスムースに行えるよう制度を運営し、国民の生活、福祉に積極的に関与する」というものです。（一部文章を省略しています）（注１７）

今日の日本で、自助は当然のこととされ、公助の拡大は財政ひっ迫の折から困難とみられており、共助の拡大が望まれています。

より原理的に考えても、共生社会の実現を共助の実現範囲の拡大ととらえ、共助の活動こそ、共生社会を目指すときの最も重視すべき活動の在り方です。

紹介しました手づくり型観光活動の事例などは、町や地域が抱える社会の問題を解決しようとする際に、それが、社会が抱える問題である以上、１人で解決するには問題が大きす

ぎ、かといって、その解決を行政に押し付けるのは、ムリがある。あるいは妥当でない。

たとえば、とりあえずは市民全体利害とは関係が薄い場合や、成功するかどうかわからない案件である時など、自分達、広い意味でのステークホルダー、関心を同じくするもので、力を合わせて解決しようとする活動であり、まさに自助ではなく、公助でもない共助という考え方が当てはまります。

前述のＮＰＯ地域作り工房地域の「地域の課題を自分たちの仕事として解決する」という
モットーが、もっともふさわしい表現です。

②共生社会の雛型：ミッションを追及する中間組織、非営利団体手づくり型観光活動を担っているのは、単なるボランティア的個人の集まりであったり、それが発展して、NPO 活動法人や社会企業になったとしても、形はともあれ、自由な個人の自発的意思に基づく集まりであり、活動です。私はこれをミッション追求型団体（ボランティア意識にもとづく組織）と呼びたい。

それは、利潤動機を活動の原理とする民間企業、営利企業とも、また、法に定められた職務を実行する行政団体、政府とは違う組織です。組織自体が共生社会の小さなモデルです。強制でなく、営利でもなく、人が自由に、自主的に集まり、リーダーはいるものの、ゆるやかな合議制の下、物事を決定し、実行していく組織の在り方は、共生社会の雛型と言ってよい。

③多様な主体が役割を果たす社会

そして共生社会とは、このミッション追求型団体、非営利団体（ボランティア組織）が、営利企業や政府とならんで、重要な役割を果たすような社会です。少なくとも現在の日本、アメリカやほとんどの既存の国家がそうであるよりも、ミッション追求型団体、非営利団体（ボランティア組織）の活動が大きな役割を果たす、社会に占めるウエートが大きいような社会ではないかと考えています。

すなわち、多様な社会的、活動主体（企業、行政、そして広い意味での非営利団体、ミッション追求型組織）が、それぞれ自由に、かつ相互に関係を持ちながら存在する社会です。

かつて、圧倒的多数の社会主義経済研究者や学者に先んじ、かつ抗して 1960 年～70 年代のユーゴスラビアの自主管理社会主義を研究しました岩田昌征教授（当時北大）は「現代世界のトリアーデ」と題して提出した考えのなかで、自由と競争を原理とするアメリカ、イギリス型社会、平等・計画経済を原理とするソ連型社会にたいして、ユーゴスラビア自主管理社会主義が「友愛」「協議」を原理とする社会を目指していると述べていました。

塩沢由典等も述べるように、１９８９年～１９９０年代にソ連、東欧の社会主義国家が雪崩をうって崩壊し、ユーゴスラビアが、すさまじい民族抗争・殺し合い・戦争を経て諸民族の国家に分解してしまった今日、ユーゴ型の自主管理社会主義社会が、人類が目指すべき理想社会に最も近い社会の形だったかどうかは疑問です。

しかしながら、どのような社会もその内部に自由、平等、友愛の３つの理念にもとづく社会原理、社会経済システムを内包していることは間違いのない事実です。

つまり、現代日本を見ても、政府の諸政策があり、営利企業が活動し、非営利団体やボランティア団体も存在しているという３者の混在、共存する社会です。しかもそれは、市場経済というベースの上に存在しています。（当然のことですが、市場は資本主義経済固有のものではなく、古代にも中世にも市場は存在していました。）

私が考える共生社会への道筋は、このような３つの要素が、社会に中でバランスよく機能する社会へ近づくことです。現在の日本は自由・競争の企業社会、平等原理の行政・政府の存在に比べると、友愛原理に基づく非営利・ボランティア組織の存在ウエートがあまりにも小さすぎます。

手づくり型観光活動を進める諸組織が、現状よりもより一層発展することは、社会の中での友愛原理の組織的表現：ミッション追求型・非営利中間組織の拡大の一つであると考えています。（注１８、注１９、注２０）

④　地方創生と手づくり型観光活動

内閣の目玉施策として「地方創生」が言われて久しい。もともとは、内閣の思惑と密接に連携して、増田寛也の著書「地方消滅」（初出は中央公論２０１４年６月号）が「消滅」という衝撃的な発言をしたことに端を発している。この主張を鋭く批判して、本当の地方創生には「地方が自らから稼ぐことが不可欠です」と主張したのが、井上斉の著書「地方創生大全」です。増田批判は、別にゆずるとして、井上の主張は、国や県の指導（補助金をえさにした強制的命令）に仕方なく従って、各自治体ほぼ横並びの、ほとんどはあまり役に立ちそうもない「創生計画」や「人口ビジョン」を作成した（させられた）地方自治体には耳が痛いが、まっとうな、すこぶる役に立つアドバイスとなっています。

井上の主張は「本当に地域の生き残りを願うなら、国や県やコンサルタントの言いなりにならずに、自分でよく考え、安易に補助金に頼ることなく、自分の責任と資金で事業を起こし、儲けよ、稼げよ」「稼ぐ地域がいき残る」ということに尽きます。まったく正しい。

ただあえて言うなら、井上のような言い方をすると、「稼ぐことが自己目的的に追求される」ことになりかねない。これには、私は「本当にそうか？」と言いたい。井上が紹介する地域の人々の、地域のための活動には、根本の動機として「地域が好きだ、地域のために何とかするのだ」という気持ちがあり、そのために、失敗を重ねても、失敗に学びながら事業を成功させているのです。

この人たちの気持ちは、たとえ、スローガンが「稼ぐ」であっても、本音は「地域のために何とかしたい、ここで仲間と力をあわせ・・・。」という、本稿で紹介した手づくり型観光にたずさわる人々の使命感と共通するものがあると感じられます。

確かに使命感に酔いしれ、頭でっかちとなり、肝心の事業がいいかげんなものになり、結果として稼ぐ努力がおろそかになってはいけないので、井上の本が有益なことはまちがいないのですが・・・。

ともかく、国や県に言われるのでなく、自分の頭で考え行動することが、すべての出発点であることは間違いありません。その点、今回の地方創生の取り組みも、始めから自分で考えて行動しているわずかな地域を除いて、たいした成果は生まれないと予想します。なにしろ、聞くところによれば、平成１４年度の年度末に政府の計画が発表されると、すぐに、「補正予算にあげたいから形だけでも早く計画を作れ」と総務省の担当者から自治体に矢の催促があったといいます。長年悩んできた地域の衰退の対策が、２～３ヶ月かけて考えたからといって、出てくるはずがありません。（注２０、注２１）

⑤　稼ぐということ

「今回紹介した事例は稼いでいるのか？地域経済学的に見てどうなのか？」という疑問に答えたい。

事例１の高取町の場合は、働き手の人件費はゼロです。リタイヤした人が大半だからです。そして個々のイベントの収支では、必ず使った経費をうわまわる収入を稼いでいます。１０年が経過し、当初のイベントの時だけのテント張り食堂から、自前の大きなレストラン・カフェ「もこもこ」を開業し通年営業しています。また、土佐街道の町並みに多くの飲食店、土産品などの店が新しく開業しています。

事例２の深野の場合は、確かに、地区を訪れる人は増えています。ただ、北野さんが今後の課題としているように「来ていただいた人に、お金を落としてもらう仕組みがまだない」とのことです。

事例３の農家レストラン「粟」は、はじめから株式会社としてスタートしており、開業以来十数年間、好調を持続しています。すでに、２号店、３号店が開業しています。

事例４の空掘り界隈、事例５の伏見の町づくりはともに、直轄の事業で黒字を出しています。そのうえ、両地域とも近年、新しいお店が続々開業しており、地域が変わってきたことは町の人が認めるところです。

いずれも小さなエリアのことなので、市町村の統計で確かめることは困難ですが、地区別に見れば稼ぎは増えています。

⑥　地域づくりと国民経済の共生社会化

本稿で述べたような手づくり型観光の事例は、全国いたるところで生まれています。広く住民主体の地域づくり、地域経済おこしであったり、地域エネルギー開発などの取り組みが広がっています。藻谷浩介氏らが主張する「里山資本主義」にも述べられていますが、注目すべきは、一つの国の中で、グローバルな経済と結びついた経済が動いている一方で、それともかかわりつつ、グローバル経済の論理とは異質なアンチテーゼとも言うべき自給自足的、共生型の経済が地域に生まれ出ていることです。

かつての高度成長期にも都市と地方の経済の違いはありましたが、それは進んだ都市経済とそれにぶら下がる遅れた地域経済であり、後者は発達から遅れた、だめなもの、克服されるべきものでありました。

しかし、今は違います。グローバルな高度資本主義経済とは異質の独自の価値を持った

経済が地域に生まれ始めています。これが進めば、おそらく異質な２種類の経済システムがかかわりを持ちつつ共存する国＝日本ができるのではないかと考えます。

今まで、国民経済を考えるとき、それが資本主義であれ、社会主義経済であれ、一国を単一の価値観に貫かれた経済（体制）システムが考えられていました。だから体制の転換＝革命を考える人も少なからずいたのですが、そうではない、「経済システムの共生」ともいうべきものが実現し始めているのかもしれません。

もっとも、資本主義の始まりも封建社会の経済システム中に資本主義経済システム封建社会経済システムとかかわりを持ちつつ、それと共存する形で生まれ大きくなっていったわけで、これが経済システム変化の普通のあり方かもしれません。（注２３）

あとがきにかえて：観光の真の目的は何か？

私の知る地域づくり活動、手作り的観光活動を、共生社会論とのかかわりで述べてきました。このため、観光の本質論や近年の社会の動きに触れることはできませんでした。ただ、あえて述べるならば、近年の政府などが唱える「観光立国論」は、あまりにも産業振興論、それもインバウンドで稼ぐといった観点のそれが勝ちすぎています。

観光は、産業である側面を持ちつつも、その本質は、産業にとどまらない、人と人の交流にあると、心ある人は考えています。本稿で紹介しました地域の、手作りの観光活動の担い手も、そのような観光の本質を大切にしていることを強調したい。（注２４）

注１：独立系シンクタンク：大手金融機関や行政が作ったものではないシンクタンクを前２者と区別して独立系と呼ぶ。

注２：国民生活白書、観光白書などの政府文書

注３：農業の６次産業化：単に農作物を作って農協などに収めるだけの農業から、農産物を加工し、販売ルートを自ら開拓する。あるいは農家レストランや農家民宿を経営するような第２次産業、第３次産業へ展開をはかる農業への転換のこと（１次産業×２次産業×３次産業＝６次産業）

注４：村田武一郎他 奈良の将来ビジョンをつくるフォーラム「奈良の将来ビジョン第１次提案」　2011 年、同「奈良の将来ビジョン」（県民からの 129 の提案）　2012 年

注５：このような観光の変化に対応して、従来型の旅行会社が行っている観光にも変化がみられる。たとえば、ネットワーク社会の特性を生かして新しい業態を開発している「じゃらん」や観光客自体が旅行づくりに参加するような形をとる「クラブツーリズム（近畿日本ツーリスト）」の活動です。これらについては、機会を改めて検討したい。

注６：野村幸治「値域資源を生かした地域づくり」　2011 年フェニック大学講義の資料

注７：天の川実行委員会「高取町家の雛物語」京阪奈情報教育出版　2015 年

注８：北森義卿「少子高齢化が進む中山間地域の地域づくり」　2015 年

注９：北森義卿「地方創生のかぎは「若者に郷土のすばらしさを」フェニックス大学講義資料　2016 年

注 10：三浦雅之「大和野菜の底力」　家の光　2006 年 11 月
注 11：三浦雅之・陽子「家族野菜を未来につなぐ」　学芸出版社　2013 年
注 12：六波羅雅一「町の資源」「からほり倶楽部の活動」　六波羅真建築研究所　2010 年
注 13：六波羅雅一「町の資源とその活性」からほり倶楽部
注 14：永山恵一郎「港町・宿場町・城下町・酒蔵の町　京都 伏見」　奈良県立大学講義資料　2014 年
注 15：永山恵一郎「変わる伏見・まちづくりはエンドレス」地域開発　2006 年 11 月
注 16：くるくるエコプロジェクトは、長野県大町市の｜ＮＰＯ地域づくり工房」の事業。地域の扇状地を流れる水路をつかったミニ水力発電事業や菜の花オイルなどで知られる。「地域の課題を自分たちの仕事として解決する」をモットーにしている。
注 17：橘木俊　編著「共生社会を生きる」　晃洋書房　2015 年
注 18：岩田昌征「社会主義・資本主義・複数主義　」経済セミナー　1989 年 11 月
注 19：岩田昌征「現代社会主義の新地平」日本評論社　1983 年
注 20：塩沢由典「市場・組織・ネットワーク」経済学雑誌 95 巻 1・2 号
注 21：増田寛也「地方消滅」中公新書　2014 年
注 22：木下斉　「地方創生大全」東洋経済新報社　2016 年
注 23：藻谷浩介「里山資本主義」角川書店　2013 年
注 24：鈴木忠義｜人間の｜喜び」と｜生きがい」を生む観光地づくり」観光文化 215 号　日本交通公社　2012 年

参考文献

金井他「着地型観光」学芸出版社
岡本伸之「観光学入門」有斐閣
加藤恵正編「都市を動かす」同友館
伊佐他「市民参加のまちづくり」創成社
山崎亮「コミュニティデザイン」学芸出版社
D・アトキンソン「新・観光立国論」東洋経済新報社
池田他「地域マネジメント戦略」同友館
木下斉「稼ぐまちが地方を変える」NHK 出版
和田芳治「里山を食いものにしよう」阪急コミュニケーション
山下祐介「地方消滅の罠」ちくま新書
山下祐介「地方創生の正体」ちくま新書
大江正章「地域の力」岩波新書
大江正章「地域に希望あり」岩波新書
小田切徳美「農山村は消滅しない」岩波新書
リクルート「とーりまかし」各号
他